

平成16年（行ウ）第47号公金支出差止等請求住民訴訟事件

原告 藤 永 知 子 外31名  
被告 埼 玉 県 知 事 外1名

本日付原告ら準備書面の要旨

2006（平成18）年4月19日

さいたま地方裁判所

第4民事部 合議係 御中

原告ら訴訟代理人

弁 護 士 佐々木 新 一  
弁 護 士 野 本 夏 生 外

原告らは、本日提出した平成18年4月19日付準備書面（4）の内容について、下記のとおり要旨の説明を行う。

記

1、本日提出した書面は、治水面でのダムの必要性に関するものです。

(1) 図1 この点に関する原告の主張を要約すると、以下の3点になります。

- ① カスリーン台風が再来した場合の八ツ場ダムの治水効果はゼロであるということ  
\* カスリーン台風とは、戦後まもなく東北・関東地方に大災害をもたらした台風です。当時は占領米軍が台風の一つ一つ女性の名前をつけていました（カスリーン～KATHLEEN）。
- ② きわめて過大な洪水流量を想定した利根川治水計画は現実性がなく、破綻していること
- ③ 利根川は、河道整備を計画通りに実施すれば200年に1回の洪水への対応が可能である。ダムを造る必要はない。

(2) 図2 利根川治水計画との関連で、八ツ場ダムの必要性は次のように説明されています。

\* 利根川水系河川整備基本方針（平成18年2月、国土交通省河川局）

- ① 昭和22年（1947年）のカスリーン台風が再来すれば、基準地点の八斗島（やったじま）で最大毎秒22,000トンの洪水が流れる（ピーク流量。200年に一度の洪水）。

→図4に進んでください。八斗島とは、利根川治水計画で基準点とされる地点

であり、群馬県伊勢崎市にあります。その上流に支流が沢山あり、ダムが配置されていることがわかつています。

- ② 上流ダム群の洪水調節によって、5,500トンをカットし、八斗島の最大流量を毎秒16,500トンにする。
- ③ 八ツ場ダムは当該計画の上流ダム群の一環をなすものである。

(3) 図3 これは国交省の資料からの抜粋ですが、「現状でカスリーン台風が再来し、利根川が破堤すれば、210万人33兆円の被害が出る」とされています。このようなものを目にすると、私たちは非常に不安になります。しかし、その根拠は客観的に検証しなければなりません。

(4) 図4 (八斗島の場所)

(5) 図5 国(被告側)の主張に対してですが、第一に、利根川治水計画のベースとされているカスリーン台風規模の台風が再来した場合、八ツ場ダムの治水効果は全くないことに注意すべきです。

(6) 図6 これは、国交省がカスリーン台風再来時の洪水流量を計算したもので、黒の線がダムが無い場合の流量、青の線が既設6ダムがある場合の流量、赤が八ツ場ダムが加わった場合の流量を示しています。これを見ると、八ツ場ダムは、流量がピークに達する前に若干の役割を果たしますが、肝心のピーク流量の削減には全く寄与しないことがわかります。

(7) 図7 これは、同じ計算に基づいて、ダムによる洪水流量の削減量をグラフにしたものですが、同じことがわかります。

(8) 図8 これは、八ツ場ダムが、八斗島地点の流量にどの程度の効果を及ぼすかをグラフにしたものです。八ツ場ダムは毎秒600トンの洪水調節機能を持つとされていますが、戦後3大洪水といわれるもののうち、最大規模のカスリーン台風に対する効果はゼロ、キティ台風に対する効果も毎秒200トン少々、台風21号に対しても毎秒180トン程度です。このように、八ツ場ダムは、大型の台風に対して、さしたる効果を発揮しないのです。

(9) 図9 そのことには理由があります。八ツ場ダムは、利根川の支流吾妻川に位置していますが、南から来た台風の雨雲は赤城山、榛名山で大量の雨を降らせてしまうので、吾妻川上流の雨量は少なくなり、降雨の時間も下流より後になるので、八ツ場ダムに水が溜まるころには、下流は洪水になってしまうということなのです。

(10) 図10 次に、利根川治水計画自体が非現実的なものになっているという問題です。即ち利根川治水計画では、八斗島地点のピーク時流量22,000トンという過大な洪水流量が想定されているために、実際に達成することができない計画になっているのです。

(11) 図11 これは、1941年以降の利根川八斗島地点の最大流量の推移を示したものです。白抜きのグラフが推測値、黒塗りのグラフが実測値となっています。これ

でわかる通り、カスリーン台風時の最大流量推測値（17,000トン）は、飛び抜けて大きな数値であり、戦後、これに匹敵するような台風は一度も来ていません。カスリーン台風時の最大流量は、1980年から22,000トンに引きあげられたのですが、この数値がいかに突出した数値かということがわかっていただけたと思います。

- (12) 図12 カスリーン台風時の被害が甚大なものとなったのには、戦争のために山の樹木が乱伐され、自然の治水力が失われていたことが大きく関連していると言われていいます。植林が進んだ現在とは、まったく異なる条件にあった訳です。
- (13) 図13 さらに、カスリーン台風再来時のピーク流量とされる22,000トン（推測値）の計算自体、過大なものといわざるを得ません。17,000トンは周辺の実績値から推測したのですが、正確な推測値は15,000トン程度ではなかったかと考えられます。また、17,000トン（実績値）と22,000トン（再来時ピーク流量想定値）との間に5,000トンもの差があるのは、実際の洪水時には八斗島上流で水が氾濫したが、現在洪水が起こっても氾濫しないとの理由によっています。しかし、この氾濫の推測値も過大なものと言わざるを得ません。
- (14) 図14 カスリーン台風再来時の計算値22,000トン（毎秒）が異常に大きな数値となるのは、流出モデルの係数の設定に問題があるためと考えられます。
- (15) 図15 このグラフは、過去の八斗島上流部の24時間雨量を横軸に、八斗島のピーク流量を縦軸にして、1947年から1950年間の推測値と、以後の実績値を示したものです。実績値については、雨量とピーク流量との間に一定の相関関係が見られるのに対し、推測値は大きく上の方向にかけ離れていることがわかります。特に47年カスリーン台風時の22,000トンは飛び抜けた数値となっています。
- (16) 図16 ここで、カスリーン台風再来時の計算値が虚構にすぎないことをまとめておきます。
- 雨量との相関関係からも毎秒22,000トンという数字は異常に大きく、実績流量は毎秒15,000トン程度ではないかと考えられます。また、八斗島上流で毎秒7,000トンもの氾濫があったと考えるのは非現実的で、せいぜい毎秒1,000トン程度と考えられます。そうすると、カスリーン台風が再来しても、最大流量は毎秒16,000トンを下回ることが確実といえます。
- (17) 図17 このように過大な洪水流量を想定したために、利根川の治水計画は現実性を失っています。利根川治水計画では、八斗島地点での洪水流量を毎秒22,000トンと想定して、河川改修で対応できるのが16,500トンまで、残りの5,500トン分は上流のダム群でという考え方が取られています。
- (18) 図18 既設6ダムと八ツ場ダムによる洪水調節量は毎秒1600トンですから、この計画によると、残りの3,900トンはこれからつくる新規ダムで対応するということになります。

- (19) 図19 この3,900トンに対応するためには、新規ダムが十数基必要になりますが、そんな数のダムを建設することは不可能です。
- (20) 図20 利根川荒川水系では、最近10年間でダム等の水源開発が14事業も中止になっているのです。利根川上流でも、ここにあるような治水目的の4つのダムの建設が中止になっています。
- (21) 図21 こうした状況からも新規ダムの建設は事実上不可能です。利根川治水計画は、それ自体、達成不可能な、現実性のないものとなっており、破綻しているといわざるをえないのです。この計画を、もし本気で維持しようとしているなら、大きな自己矛盾を犯していることになります。
- (22) 図22 ハツ場ダムも、そのように現実性のない、利根川治水計画で必要とされているものにすぎません。
- (23) 図23 それでは、利根川治水計画の破綻により、大きな台風、洪水には対応できなくなるのかというところではありません。3点目として、利根川は、河道整備を計画通りに実施すれば、カスリーン台風の再来による200年に一度の洪水へもきちんと対応できるのです。
- (24) 図24 先ほども申したとおり、現在では森林が生長しているため、ピーク時流量が16,000トンを超えることはないといえます。他方、国交省自身の治水計画の中で、毎秒16,500トンまでは河道整備で対応が可能とされています。
- 結局、利根川では、河道整備を計画通りに進めれば、カスリーン台風規模の台風の再来にも対応可能なのです。
- (25) 図25 以上のように、ハツ場ダムは、大型の台風にはさしたる役割を果たさないことが明確であるとともに、過大予測に基き、現実性を失った治水計画の中で必要とされているものにすぎません。このようなダムが無くとも、利根川の氾濫を防ぐことは可能であり、治水の面でもハツ場ダムは無用のものといえるのです。このようなダムに巨額の公金が投じられて良いはずがありません。

## 治水問題の準備書面の要点

ハツ場ダムは、利根川の治水対策を進める上で無用の存在である。

- ① カスリーン台風が再来した場合のハツ場ダムの治水効果はゼロ。
- ② きわめて過大な洪水流量を想定した利根川治水計画は現実性がなく、破綻している。
- ③ 利根川は河道整備を計画通りに実施すれば200年に1回の洪水への対応が可能。

## 利根川治水計画とハッ場ダムについて (被告側の主張)

- 昭和22年(1947年)のカスリーン台風が再来すれば、基準地点の八斗島(やったじま)で最大毎秒22,000トンの洪水が流れる。(200年に1回の洪水)
- 上流ダム群の洪水調節によって、6,000トンをカットして八斗島の最大流量を毎秒16,000トンにする。
- ハッ場ダムは当該計画の上流ダム群の一環をなすものである。

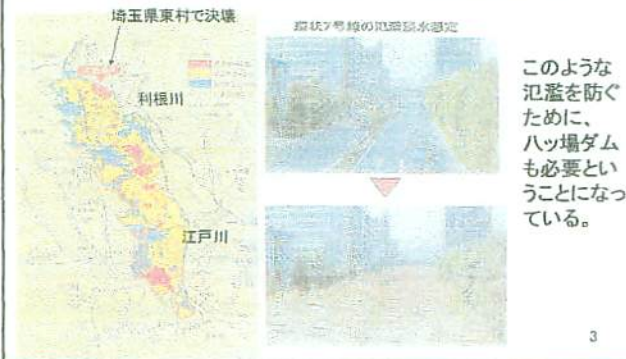
## ① カスリーン台風におけるハッ場ダムの治水効果はゼロ

利根川の治水計画のベースになっているカスリーン台風が再来した場合、ハッ場ダムの治水効果はゼロである。

5

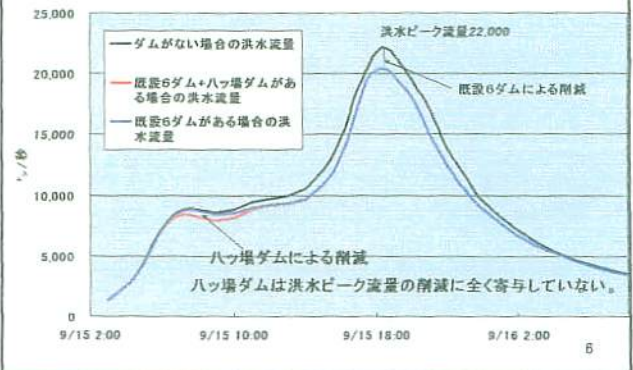
国土省の資料

現状でカスリーン台風が再来し、利根川が氾濫すれば...  
~210万人、33兆円の被害~



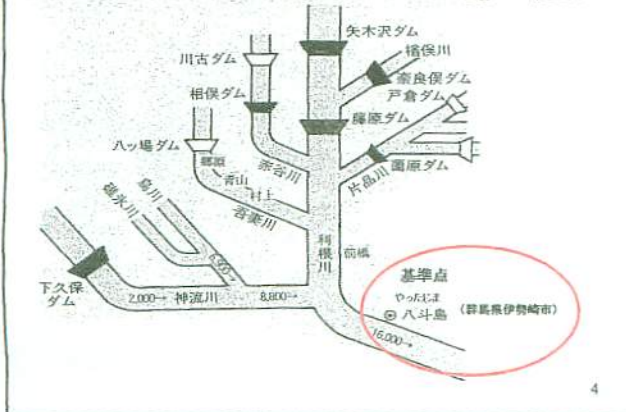
3

## 八斗島地点の洪水流量 (国土交通省によるカスリーン台風の再来計算)



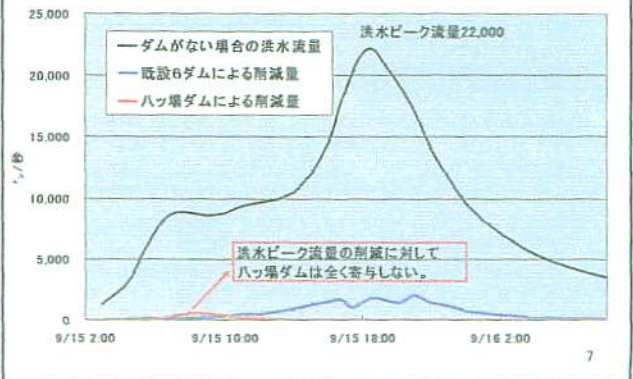
6

## 利根川治水計画の基準点「八斗島」の場所



4

## 八斗島地点の洪水流量 (国土交通省によるカスリーン台風の再来計算)



7

## 八斗島地点に対するハッ場ダムの治水効果



ハッ場ダムは大きな洪水に対しては治水効果が小さい。

## 利根川・八斗島地点の年最大流量の推移



## ハッ場ダムの治水効果が乏しい理由

### カスリーン台風(1947年)の雨量分布

吾妻川上流部は雨量が少なかった。



## カスリーン台風の実績流量が後年の洪水と比べて異常に大きい理由

上毛新聞 99.9.15

カスリーン台風で未曾有の洪水流量が出たのは、山がひどく荒れていたからであった。

戦争がなかったら...

## ② 利根川治水計画の非現実性

利根川の治水計画はきわめて過大な洪水流量が想定されているために、実際に達成することができない計画になっている。

ハッ場ダムはそのように現実性のない治水計画によって必要とされているものにすぎない。

10

## カスリーン台風再来の計算値 毎秒22,000<sup>t</sup>は虚構

- 実績流量 毎秒17,000<sup>t</sup>  
(当時は観測できなかったため、推測値であるが、推測の方法に誤りがあるので、実際は15,000<sup>t</sup>程度)
- 再来計算値22,000<sup>t</sup>と17,000<sup>t</sup>との差は八斗島上流で氾濫したからだということになっているが、上流部でそれほど大量の氾濫があるはずがない。(実績流量を15,000<sup>t</sup>とすると、7,000<sup>t</sup>の氾濫)

13

カスリーン台風再来の計算値が  
毎秒22,000<sup>トン</sup>という異常に大きい値  
になる理由

流出計算モデルの係数の設定に問題  
がある。  
そのことは雨量との関係を見れば、  
明らかになる。

14

きわめて過大な洪水流量を想定したため、  
利根川の治水計画は現実性を失っている。

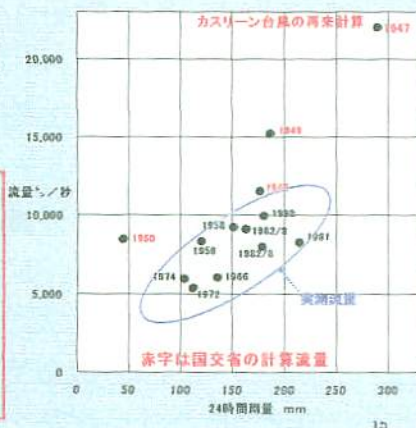
利根川の治水計画 (2006年2月策定の河川整備基本方針)

想定洪水流量 毎秒22,000<sup>トン</sup> (八斗島)

河川改修で対応できるのは、  
毎秒16,500<sup>トン</sup>までの洪水

残りの毎秒5,500<sup>トン</sup>は上流ダム群で調節

ピーク流量発生前  
の八斗島上流域の  
24時間平均雨量と  
八斗島ピーク流量



国土交通省の計算  
流量、特に、1947年  
の計算流量 22,000<sup>トン</sup>  
は異常に大きい。

流出計算モデルに問  
題がある。

上流ダム群による洪水調節量  
毎秒5,500<sup>トン</sup>

国土交通省の計算

既設の6ダム } 毎秒1,600<sup>トン</sup>  
ハッ場ダム }

これからつくる新規ダム群で毎秒3,900<sup>トン</sup>  
の洪水調節を行う。

18

### カスリーン台風再来の計算値 毎秒22,000<sup>トン</sup>は虚構

- 雨量との関係からみても毎秒22,000<sup>トン</sup>は異常に大きい。
- 八斗島上流で毎秒7,000<sup>トン</sup>も氾濫したはずがない。

- 実績流量は毎秒15,000<sup>トン</sup>程度
- 氾濫流量はせいぜい毎秒1,000<sup>トン</sup>
- 現在は昭和20年代のような裸山がなく、山の保水力が高まっている。

したがって、

- カスリーン台風が再来しても、最大流量は毎秒16,000<sup>トン</sup>以下になることは確実。

これからつくる新規ダム群で毎秒3,900<sup>トン</sup>  
の洪水調節を行うことになっているが、

既設ダムとハッ場ダムの数字から比例計  
算すると、

新規ダムが十数基以上も必要。

しかし、新規ダムの建設は現実は無理。

19



利根川荒川水系では最近10年間でダム等の水源開発が14事業も中止になった。

利根川上流でも治水目的を持つ多目的ダムが4基も中止になった。

中止になった利根川上流のダム	有効貯水容量
川古ダム	4,500 万m <sup>3</sup>
平川ダム	4,400 万m <sup>3</sup>
栗原川ダム	4,550 万m <sup>3</sup>
戸倉ダム	6,400 万m <sup>3</sup>
計	19,850 万m <sup>3</sup>

20

③ 利根川は河道整備を計画通りに実施すれば、カスリーン台風の再来による洪水(200年に1回の洪水)への対応が可能

23

利根川では、治水目的もある大きなダムが次々と中止になってきているのだから、これから新たに治水ダムの計画を立てて建設することはきわめて難しい。

事実上、新規ダムの建設は不可能

したがって、利根川の治水計画は実際に達成不可能な、現実性のないものになっている。利根川の治水計画は破綻している。

カスリーン台風が再来しても、森林が生長しているので、毎秒16,000<sup>t</sup>以下は確実

治水計画では毎秒16,500<sup>t</sup>までは河道整備で対応

利根川では、河道整備を計画どおりに進めれば、カスリーン台風並みの洪水への対応が可能。

24

ハツ場ダムはそのように現実性のない利根川治水計画で必要とされているものにすぎない。

22

役に立たないハツ場ダムなどなくても、利根川の流域を氾濫を守ることは十分に可能であり、ハツ場ダムは治水上、無用の存在である。

25